

《資料紹介》

烏丸丸太町発見の集落跡

山本 雅和

1. はじめに

平安京跡の発掘調査では、ほぼ例外なく平安京造営前の遺物が出土し、時には平安京下層で遺構が検出できることがある。周知されている平安京下層の遺跡には、聚楽遺跡・内膳町遺跡・烏丸御池遺跡・烏丸綾小路遺跡・西ノ京遺跡・壬生遺跡・西京極遺跡・衣田町遺跡・唐橋遺跡などがあり、調査によって資料が蓄積されつつある⁽¹⁾。

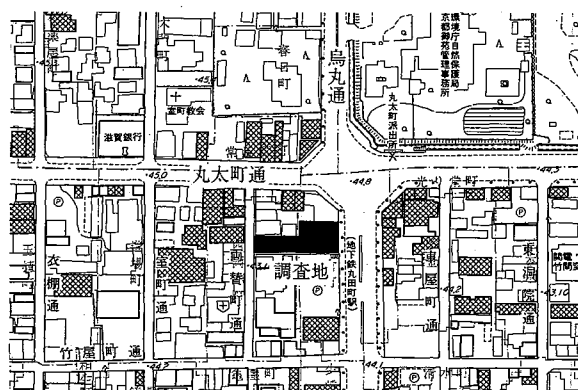


図1 調査位置図 (1:5,000)

さて、近年、京都御苑南西側一帯において実施した発掘調査で、平安京造営前の遺構・遺物が多数確認されている。中でも筆者が担当した烏丸丸太町交差点南西側の発掘調査（現ホテルハーヴェスト）では、⁽²⁾ 竪穴住居・土器棺墓を検出することができた。この調査の概要については既に報告しているが、ここで改めて平安京造営前の遺構・遺物の紹介を行なうこととしたい。

2. 調査の概要

調査地は京都市中京区烏丸通丸太町下る大倉町に位置する（図1）。発掘調査は1991年5月13日から10月4日にかけて実施した。調査面積は約390m²である。

調査地は平安京左京二条三坊十町の北東部にあたり、また、中世・近世には市街地の一部を形成していたと推定できた。そのため調査は江戸時代前期の遺構面から開始し、調査の結果、平安時代から江戸時代に至る多数の遺構を検出すると共に多量の遺物を採集した。

平安京造営前の遺構は、調査開始当初、調査区北東部の江戸時代の井戸掘形壁面で、後述する竪穴住居1の土器群を認めたので、その存在が明らかとなっていた。そのため、平安時代の遺構面の調査終了後、この時期の遺構を精査することができた。

3. 平安京造営前の遺構

平安京造営前の遺構は、調査区北部と南東部の地山上面と直上の土層上面で検出した（図2）。他の部分では平安時代以降の攪乱が地山を切り込んでおり、遺構は残っていない。

検出した遺構は、竪穴住居3基・土器棺墓1基である。いずれも著しく攪乱を受けている。竪

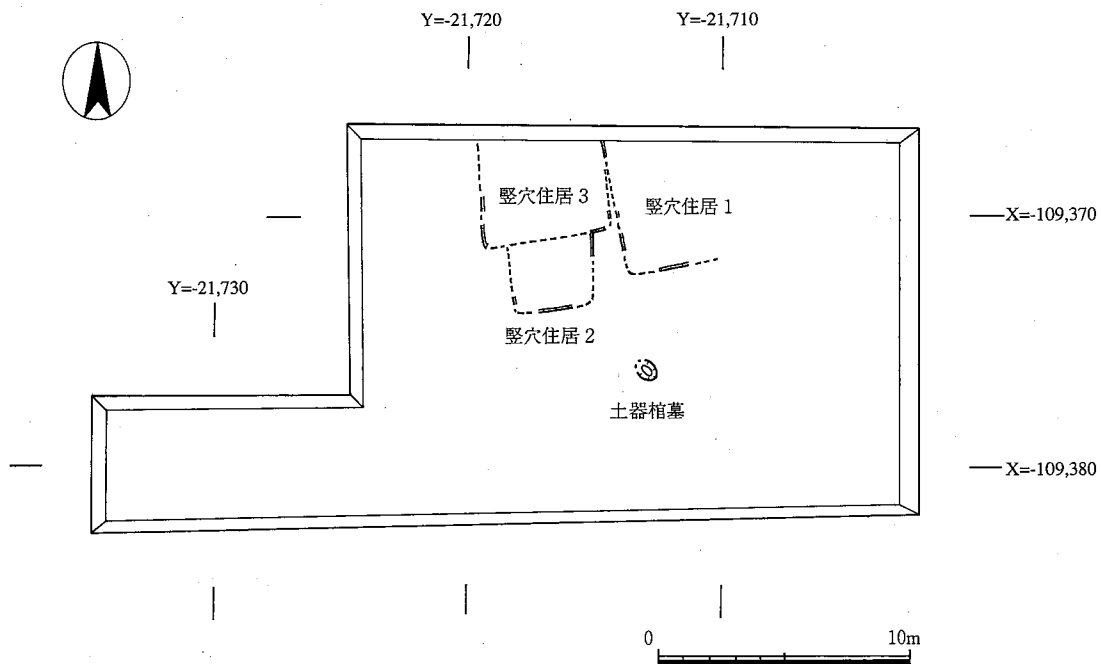


図2 遺構概要図

穴住居は調査区内では最も地山の標高が高い所になる。その他にも数基の土壙・柱穴を検出しているが、まとまりをつかめていない。

竪穴住居 1 調査区北部北壁際で検出した（図3・写真1）。竪穴住居3と接するが、前後関係を層位的に明らかにすることはできなかった。西壁・南壁の一部が残存しており、北壁は調査区外になる。東壁は攪乱のため残っていない。平面形は南北5.5m以上、東西4.0m以上の方形に復元できる。北から西へ約10度の方位をとる。検出面からの深さは約20cmである。柱穴は床面上で5基を認めたが、支柱穴としてはかたよった位置にある。深さはいずれも約10cmである。また、西壁・南壁際に幅約20cm、深さ約5cmの壁溝を検出した。南壁中央付近はさらに約10cmの深さで落ち込んでいる。埋土は灰黄褐色砂泥・明灰黄褐色砂泥・にぶい黄褐色砂泥で、西壁際で壁溝が下の2層を切り込むので、これらは貼土と推定できる。また、南東部の床面直上からは壺・甕・高杯・鉢が一括して出土し（写真2）、庄内式併行期に属することが判明した。

竪穴住居 2 調査区北部の竪穴住居3の南側で検出した（図3・写真1）。西壁・南壁・東壁の一部が残存しており、竪穴住居3と重複する北壁は残っていない。平面形は南北2.8m以上、東西約3.2mのやや歪んだ方形に復元でき、竪穴住居としては小型である。北から西へ約5度の方位をとる。検出面からの深さは約20cmである。柱穴・壁溝・竈は認めていない。埋土はにぶい黄褐色砂泥・黄褐色砂泥・灰黄褐色砂泥で最上層から須恵器の小片が出土した。古墳時代後期もしくはそれ以前に属すると考えられる⁽³⁾。

竪穴住居 3 調査区北部北壁際、竪穴住居1の西側で検出した（図3・写真1）。竪穴住居1と接し、竪穴住居2を壊して成立している。西壁・南壁・東壁の一部が残存しており、北壁は調

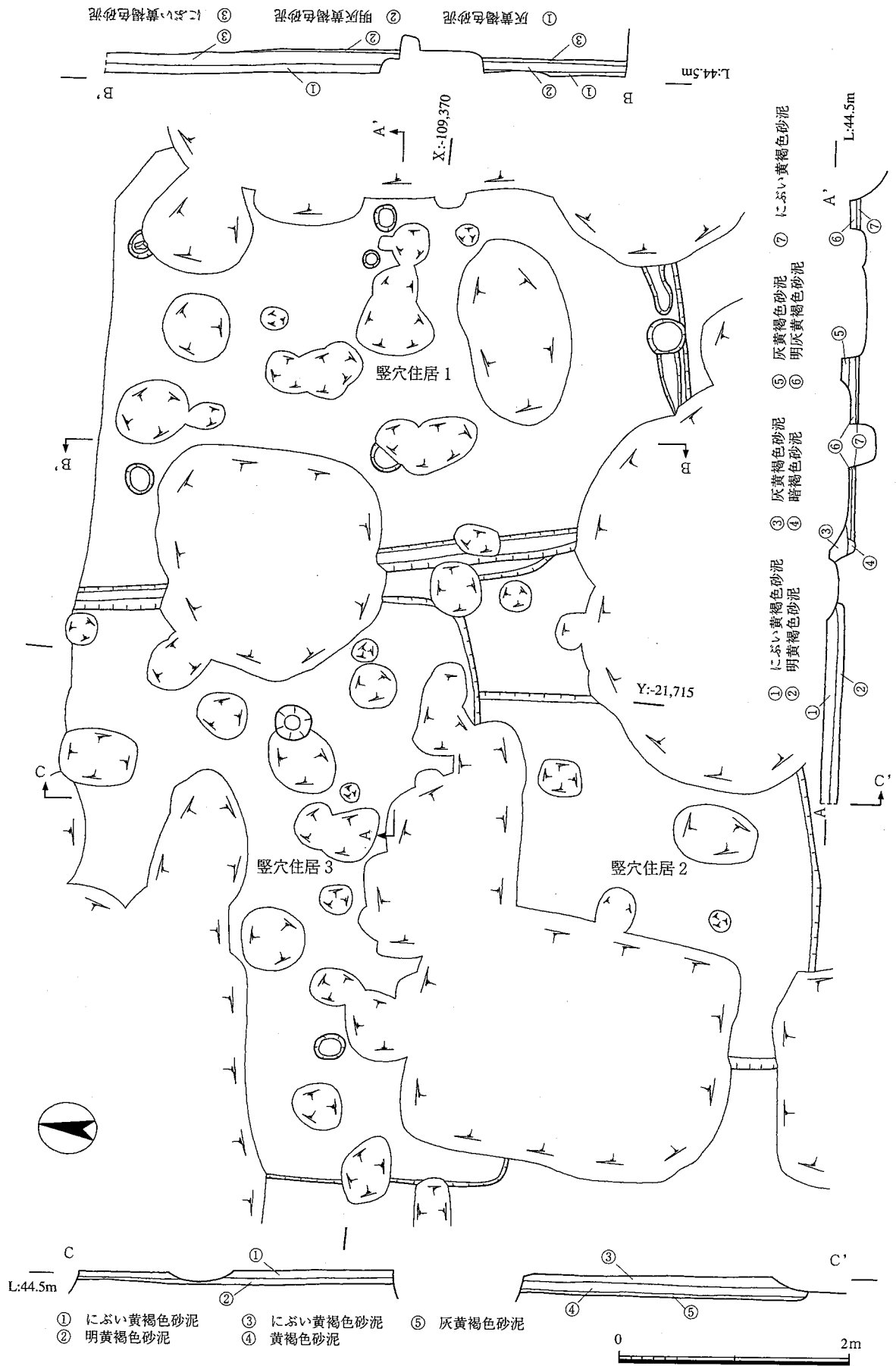


図3 竪穴住居群実測図



写真1 竪穴住居群全景（西から）

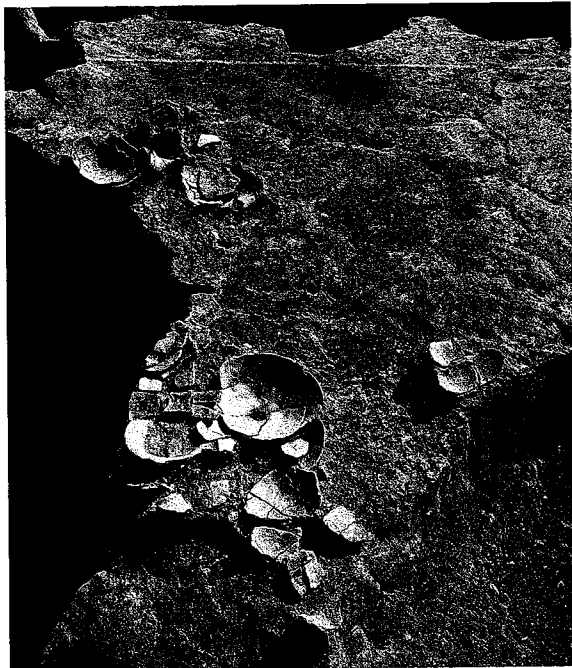


写真2 竪穴住居1土器出土状況（北東から）

査区外になる。平面形は南北4.0m以上、東西約5.1mの隅丸方形に復元できる。北から西へ約5度の方位をとる。検出面からの深さは5～8cmに過ぎず、大部分は削平されたと推定できる。柱穴は床面上で2基を認めたが、いずれも浅く不明瞭である。壁溝・竈は認めていない。埋土はにぶい黄褐色砂泥・明黄褐色砂泥で須恵器の小片が出土した。古墳時代後期に属する。

土器棺墓 調査区中央部南東寄りで検出した。北西端が攪乱を受けているが、平面形は長径約1.0m、短径約0.7mの楕円形に復元できる。深さは約0.4mである。土壌内には口縁部を南東に向けて土師器長胴甕が斜めに据えてあった。古墳時代後期から飛鳥時代に属する。

4. 平安京造営前の出土遺物

調査で出土した平安京造営前の遺物には土器類と石製品がある（図4）。土器類には土師器（1～18）と須恵器（19～22）があり、竪穴住居1床面出土土器以外は、ほとんどが小片で磨滅がすすんでいる。石製品は椀形をした小型滑石製品1点が壁面から出土した。

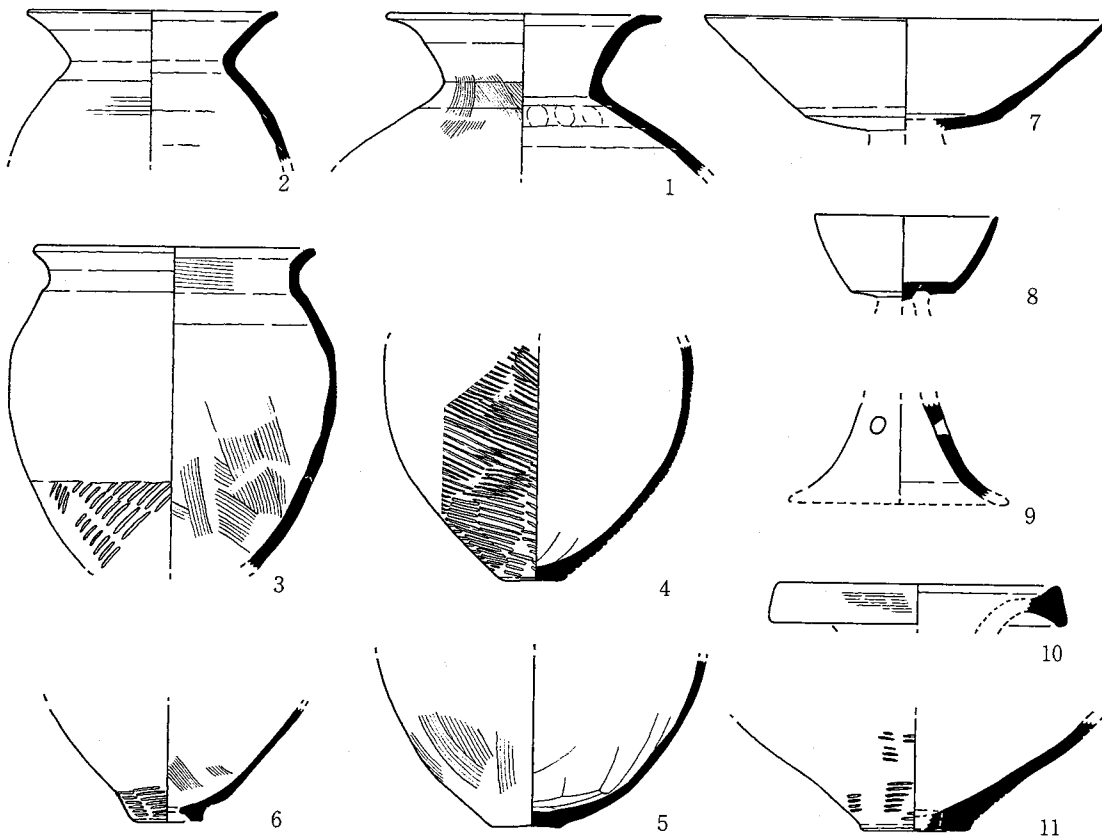
竪穴住居1からは土師器の壺（1・10・11）・甕（2～5）・鉢（6）・高杯（7～9）が出土した。1～9は南東部床面、10・11は埋土からの出土である。

1は口縁部が肩部から強く外反して開き、端部を丸くおさめる。調整は肩部外面はタテハケ後ナデ、内面はオサエ後ナデで、口縁部は内外面ともヨコナデである。肩部内面には粘土の継目が残る。

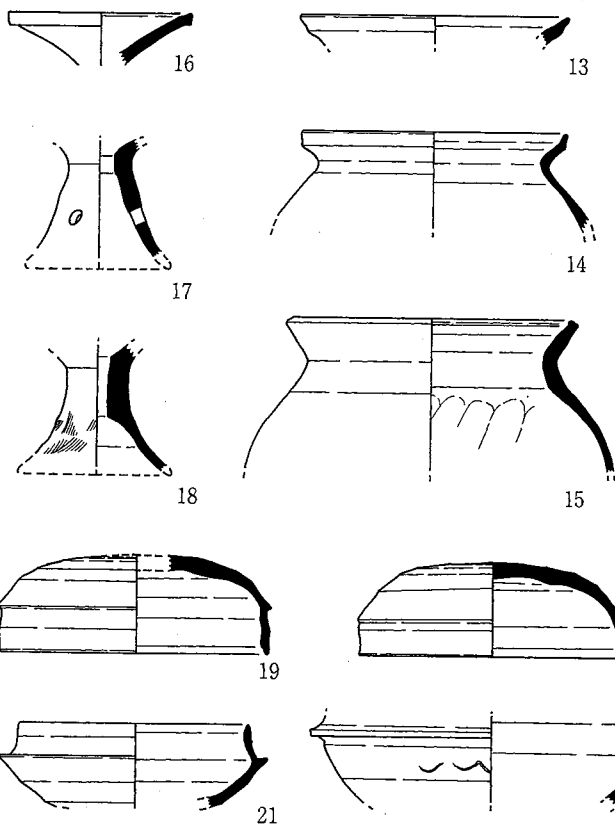
2は口縁部が肩部から強く外反して開き、端部を丸くおさめる。調整は肩部は内外面ともナデ、口縁部は内外面ともヨコナデで、肩部外面に櫛描直線文を施す。肩部内面には粘土の継目が残る。

3は口縁部が倒卵形の体部・肩部から緩やかに外反して開き、端部を丸くおさめる。調整は体

竪穴住居1



その他の遺構・包含層



土器棺墓

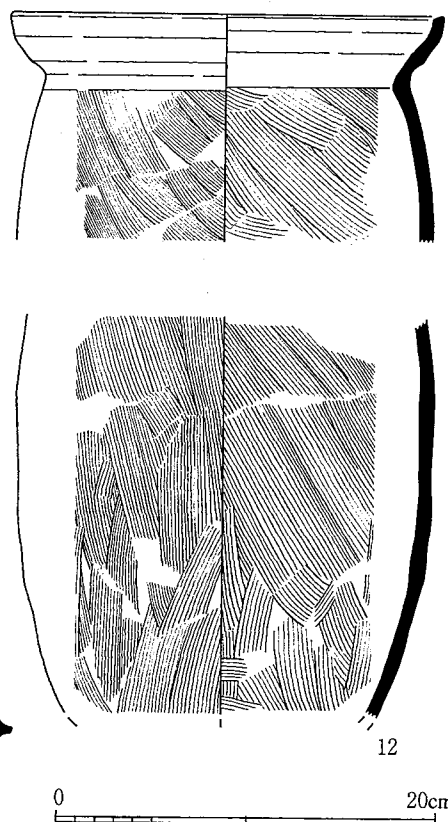


図4 出土土器実測図

部下外表面はタタキ後ナデ、体部上半・肩部外表面はナデ、体部・肩部内表面はタテハケ後ナデで、口縁部内外表面はヨコナデである。頸部内表面にはヨコハケの痕跡が残る。体部外表面には粘土の継目が残る。体部下外表面には煤が付着する。

4は倒卵形の体部であったと推定できる。底部は小さい平底である。調整は底部外表面はナデ、体部外表面は密なタタキで、内表面は縦方向の丁寧なナデである。体部外表面のタタキは上半が下半よりも細かく原体の違いと推定できる。体部下外表面には黒斑があり、上半外表面には煤が付着する。

5は倒卵形の体部であったと推定できる。底部は小さい平底である。調整は底部外表面は粗いナデ、体部外表面は粗いハケ後ナデで、底部・体部内表面は左上がり方向のケズリである。底部外表面は赤変し、体部外表面は全面に煤が付着する。

6は小さい平底から口縁部が内弯して開く。調整は底部は内外表面ともオサエとナデで、口縁部外表面はタタキ後ナデ、内表面はハケ後ナデである。外表面のタタキは底部付近以外はナデで擦り消される。穿孔は焼成前に行なう。口縁部外表面に黒斑がある。

7は杯部のみで、口縁部は体部からわずかに屈曲して直線的に大きく開き、端部を丸くおさめる。調整は体部外表面は螺旋状のミガキ、内表面は方向不明のミガキで、口縁部は内外表面とも縦方向の放射状のミガキである。ミガキの密度は1cmあたり4条程度である。内表面に黒斑がある。

8は杯部のみだが、大きく開く脚部をもつと推定できる。口縁部は体部から強く屈曲して内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。調整は表面の損傷のため不明瞭で、わずかにミガキの痕跡が観察できる。脚部との接合技法は粘土充填である。

9は脚部の破片で裾部が緩やかに外反して開く。透孔は三方で外表面から穿孔する。調整は裾部外表面は縦方向の放射状のミガキ、内表面はシボリ後ナデで、端部は内外表面ともヨコナデである。ミガキの密度は1cmあたり4～5条程度である。

10は口縁部の小破片である。端部は拡張して面をもつ。調整は内外表面ともヨコナデで、端面に櫛描直線文を施す。

11は小さい平底から体部が直線的に広がる。調整は底部外表面はナデ、体部外表面はタタキで、底部・体部内表面は縦方向の丁寧なナデである。底部は粘土充填により成形する。

12は土器棺に用いられていた長胴甕である。攪乱のため一部が欠損し、口縁部と体部を接合することができなかった。口縁部は肩部から屈曲して開き、端部は内弯して面をもつ。調整は体部は内外表面ともハケで、口縁部は内外表面ともヨコナデである。体部のハケは外表面が内表面よりも細かく原体の違いと推定できる。

その他の遺構や包含層からも土師器の壺・甕（13～15）・高杯・小型器台（16～18）、須恵器の蓋杯（19～21）・壺・甕などが出土した。

13は口縁部の小破片である。端部はわずかに屈曲して丸くおさめる。調整は内外表面ともヨコナデである。

14は口縁部が肩部から外反して開き、端部は受口となる。調整は体部は表面の損傷のため不明

で、口縁部は内外面ともヨコナデである。肩部外面に黒斑がある。

15は口縁部が肩部から外反して開き、端部は肥厚する。調整は体部・肩部外面は表面の損傷のため不明瞭で、わずかにタテハケの痕跡が観察できる。体部・肩部内面はオサエで、口縁部は内外面ともヨコナデである。体部・口縁部外面の一部に煤が付着する。

16は口縁部が直線的に開き、端部に面をもつ。調整は表面の損傷のため不明である。

17は裾部が緩やかに外反して開く。透孔は三方で外面から穿孔する。調整は表面の損傷のため不明である。なお、16・17は同じ土壌から出土しており、同一個体である可能性が高い。

18は脚部の破片で、裾部は柱状部から直線的に開く。調整は外面はハケ後縦方向の粗いミガキで、裾部内面は丁寧なナデ、柱状部内面には芯棒痕が残る。ミガキの密度は1 cmあたり3～4条程度である。

19・20は天井部は平坦で、口縁端部は内傾する面をもつ。屈曲部外面には稜がめぐる。調整は天井部外面は回転ケズリで、他はすべてヨコナデである。

21は体部は内弯気味で、受部は水平方向にのび、立ち上がり部はやや内傾する。調整は底部外面は回転ケズリで、他はすべてヨコナデである。

22は器形不明の小破片で、内弯する体部の最大径付近に突帯が一条めぐる。調整は内外面ともヨコナデで、体部外面に沈線で波状文を施す。体部下半外面にはケズリの痕跡が残る。器形は杯身・壺の体部・器台などが想定できる。

出土土器の時期は、竪穴住居1の床面出土土器(1～9)は形態や技法に弥生時代後期の特徴を残すものの、4の体部外面のタタキ・5の体部内面のケズリなどに新しい要素が見られるので、庄内式併行期に属すると考える。13～18も同じ頃もしくはやや新しい時期のものと推定する⁽⁴⁾。なお、竪穴住居1の埋土出土土器(10・11)はやや古い時期のものが混入した可能性がある。19～21はMT15型式の特徴を備えているので、古墳時代後期に属すると考える⁽⁵⁾。22は器形が不明であるが、調整などの特徴から初期須恵器に属するとみてよい⁽⁶⁾。また、杯身とすると体部外面に波状文を施すことから東海地方で製作された須恵器との関連がうかがえる⁽⁷⁾。12は形態・技法の特徴から6世紀末から7世紀前半に属すると考える⁽⁸⁾。

5. まとめ

ここで京都御苑南西側で平安京造営前の遺構を検出した主要な調査の概要をまとめておく。

室町通榎木町下る大門町の発掘調査では、飛鳥時代の須恵器杯類や製塩土器が出土した⁽⁹⁾。間之町通竹屋町下る楠町の発掘調査では、弥生時代後期から古墳時代の流路を検出し、多数の土器類が出土した⁽¹⁰⁾。丸太町通柳馬場東入る四町目の発掘調査では、古墳時代後期の土器棺墓1基と古墳時代後期から飛鳥時代の流路・土壌を検出した⁽¹¹⁾。柳馬場通竹屋町下る五町目の発掘調査では、弥生時代から飛鳥時代の流路を検出した⁽¹²⁾。富小路通竹屋町下る大炊町の発掘調査では、古墳時代の流路を検出した⁽¹³⁾。また、地下鉄烏丸線建設に伴う発掘調査では、榎木町通付近から竹屋町通付近にかけての調査区で古墳時代後期の須恵器が出土した⁽¹⁴⁾。

以上のことから、この地に古墳時代から飛鳥時代の集落があったことは確実であり、「烏丸丸太町遺跡」として提唱したい。遺構検出地点や遺物包含層の分布から、北側は下立売通付近、西側は室町通付近、南側は夷川通付近、東側は富小路通付近の範囲に広がると推定できる。今回紹介した竪穴住居の存在から、烏丸丸太町交差点付近に集落の中心部があったと考えることも可能である。しかしながら、烏丸丸太町遺跡は現在の市街地と重複しており、また、平安時代以降の攪乱を激しく受けていると推察される。遺跡の全容を明らかにするためには、今後、綿密な調査による資料の蓄積が必要である。

なお、土器の特徴に関しては内田好昭・高橋潔両氏からご教示を得た。記して感謝します。

註

- (1) 『京都市遺跡地図』京都市文化市民局 1996年、『山背の古墳』京都市文化観光局 1991年。
- (2) 山本雅和・磯部勝「平安京左京二条三坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年。
- (3) 竪穴住居の時期は注(2)では「弥生時代後期後半から古墳時代初頭」としたが本稿のように変更する。
- (4) 『水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第17冊』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年、森岡秀人「山城地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社 1990年。
- (5) 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966年。
- (6) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年。
- (7) 岩崎直也「尾張型須恵器の提唱」『信濃』39-4 1987年。
- (8) 大崎哲人「土師器甕の変遷とその背景」『紀要』第6号 (財)滋賀県文化財保護協会 1993年。
- (9) 百瀬正恒・本弥八郎「平安京左京二条三坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年。
- (10) 内田好昭・高正龍・堀内寛昭「平安京左京二条四坊1」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000年。
- (11) 上村和直・山本雅和「平安京左京二条四坊2」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000年。
- (12) 堀内明博・内田好昭・久世康博・丸川義広「平安京左京二条四坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年。
- (13) 丸川義広・中村敦「左京二条四坊」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年。
- (14) 「No28」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ』1974,75年度 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980年、「No54」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』1976年度 京都市高速鉄道遺跡調査会 1981年、「No78」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』1977~1981年度 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982年。